



ウィキペディアには各国版があり、機械翻訳で簡単に読める。各国語版は独自に編集されているので、これらを比較参照することで、「プラスα」の情報を簡単に入手できる。

## 第五話 ウィキペディアをグローバルに調べる

百科事典としてウィキペディアが画期的なのは、それぞれ独自に作成される各国語版が存在することである。現在、世界の273言語(2010年8月現在)の版が存在している。日本語版は、総記事数で、英語、ドイツ語、フランス語、ポーランド語、イタリア語に続いて、第6位につけている(「Wikipedia:全言語版の統計」より)。

同じテーマの記事が他言語版にある場合は、画面の左にある「他の言語」という箇所に各国語版へのリンクがあり、簡単に参照できる。各国語版は、別々の記載者によって執筆・編集されており、記述は独自の内容となっている。

また、日本語版に記載が無い項目や記述が欠けている内容でも、海外版で見つけられる場合も少なくない。たとえば、ATM(現金自動預け払い機)に関しては、日本語版にない「ATM手数料問題」、「世界のATMネットワーク提携」も、英語版の「ATM usage fees」、「Global ATM Alliance」という項目で、それぞれ詳しい記載がある。

現在は、機械翻訳の進歩のお陰で、読めない言語でも本国語に翻訳してくれるので、記載内容が理解できる。検索エンジンのグーグルには、ウェブ閲覧ツールとして「翻訳バー」があり、このサービスを利用すれば、ブラウザ・ウィンドウの上部に翻訳バーが表示される。

これをクリックすれば、ウェブのコンテンツを、本国語だけでなく、どの言語にも即座に翻訳してくれる。勿論、機械翻訳された日本語には、微妙なものが少なくないし、解釈が難しいものもある。細かい内容は別にして、大筋の内容を把握することはできる。

正確に読み取る必要があれば、辞書を片手に自分で翻訳すればよい。また、ここで、専門用語、企業名、個人名など具体的なキーワードが入手できれば、他の日本語や英語のサイトを、再度、グーグルで検索すれば、必要な情報を集めるのは難しくない。

このように、ウィキペディアの各国語版とグーグルの翻訳バーを利用すると、各国語版との比較が簡単にでき、「他人と一味違う情報を入手する」ことができる。むしろ、グローバルな時代を迎え、各国語版のコンテンツを比較参照するのは、不可欠になっている。

日本に関係する情報(日本企業、日本製品、日本文化、日本人)であっても、例外ではない。日本の先進企業の多くは、世界中でビジネスを展開している。日本発の食品や製品は、寿司やインスタントラーメンをはじめ、世界各地で販売されているし、日本の文化や伝統も、世界から注目を集めているからである。

日本企業についての英語版では、項目「List of companies of Japan」（日本の企業一覧）に、企業名の一覧が掲載されており、各企業を説明する項目にリンクされている。日本人的な視点ではなく、グローバルな視点、また世界各地のローカルな視点から、どのように伝えられているかの情報を入手できる。

たとえば、「トヨタ自動車」（日本語版）は、日本国内の記述が中心になっているが、「Toyota」（英語版）は多国籍企業としてグローバルな視点から記述されている。「日産」（ポルトガル語版）には、日本語版には記載されていない「ブラジル日産」についての記述がある。自転車部品で世界的に有名な「シマノ」を見てみると、イノベーションを武器に世界的メーカーに飛躍した歴史に関する記述は、日本語版には無いが、英語版に詳しい。

日本に関しても、外国語版に興味ある記述が次々とみつかると。たとえば、「天皇」や「皇室」に関する英語版の記述は詳しく、その内容は興味深い。たとえば、項目「Emperor of Japan」の Marriage traditions の記述は面白い。また、「支倉常長」に関する記述は、日本語版よりも、英語版、フランス語版、ポルトガル語版の方が、遙かに詳しい。

21世紀を迎え、世界中を巻き込む事件が相次いでいる。たとえば、感染症については、2009年に世界を巻き込んだ「新型インフルエンザ」、2010年には我が国の宮崎県で発生し政治社会問題に発展した「口蹄疫」がある。

経済事件では、2007年のアメリカの住宅バブル崩壊に端を発した「世界金融危機（2007年）」、今年のギリシャ経済危機に端を発した欧州の「ソブリン危機」などなど、日本語版だけでなく、各国語版を参照することが重要になってきている。

社会科学系の情報だけでなく、自然科学技術に関する情報についても、各国語版を比較参照する必要がある。たとえば、民主党政権による事業仕分けで話題を集めた「スーパーコンピュータ」について、見てみよう。

ウィキペディアに掲載されている「スーパーコンピュータ」関連の用語一覧についてみると、その項目群はかなり違っている。それは、日本語版の「Category:スーパーコンピュータ」と英語版の「Category: Supercomputers」を比較すればわかる。

具体的な記述内容についても、違いは少なくない。たとえば、歴史に登場した歴代のスーパーコンピュータの機種をしてみる。日本語版（項目：スーパーコンピュータ技術史一表：歴代 HPC の性能表）と英語版（項目：Supercomputer一表：Timeline of supercomputers）では、そのリストはかなり異なっている。

英語版では、ZuseZ1（1938）、ZuseZ3（1941）、Colossus 1（1943）、Colossus 2（Single Processor）（1944）、Colossus 2（Parallel Processor）（1946）、UPenn ENIAC（1946）、IBM NORC（1954）、.....という順で書かれている。

これに対して日本語版では、ZuseZ3（1941）、ABC（1941）、Colossus 1（1944）、ENIAC（1946）、UNIVAC LARC（1960）、IBM7030（1961）、CDC6600（1964）、CDC7600（1969）.....という順で書かれている。

この2つの表の差異は、どのスーパーコンピュータを歴史的に重要なコンピュータと位置付けるかについて、国による重要性の違いが表面化したものといえる。この違いは、「世界初のスーパーコンピュータの機種は何か」を説明する際には、大きな問題となる。

ウィキペディアに関する話題は、今回で一区切りつけ、別の機会を再度取り上げることにしたい。次回は、我が国で一番多く情報を抱え、新聞や週刊誌の主要な情報源となっている官公庁のウェブサイトの利用法について、紹介する。（ウィキペディアの記述は、日々変更されている。上記の記述は、2010年11月末時点での記述であることを、お断りしておく。）